都道府県別賞一等

最後のスマッシュと、見えないお守り

滋賀県　大津市立石山中学校　三学年

辻　真莉亜

体育館の熱気と、シューズが床を擦る音。大きく息を吸い込み、私は思い切り最後のスマッシュを打ち込んだ。だが、ピンポン球はネットを越えず、私の三年間の卓球生活が終わった。汗を拭いながら深呼吸をすると、胸の奥まで空気が澄み渡る。あの一本を全力で打ち込めたこの体が、昔は夜中に息をすることさえできなかったなんて、今でも不思議に思う。

幼い頃、私は重度の小児ぜんそくを患っていた。季節の変わり目には発作を起こし、物心付くまでに十回以上も入院を繰り返した。「ひゅーひゅー」と息ができず苦しむ夜、母はいつも同じ病室の狭い付き添いベッドで一緒に寝泊まりしてくれた。硬い簡易ベッドで寝返りも打てないはずなのに、母は夜中ずっと私の背中をさすり、「大丈夫、絶対によくなるからね。」と励まし続けてくれた。看病のために仕事を休む日々だったはずだが、私の前でお金の愚痴をこぼすことは一度もなかった。中学生になり、県大会に出場できるまで体力はついた。ただ、ぜんそくが消えたわけではない。入院するほどではなくなっただけで、今も季節の変わり目には呼吸が苦しくなり、学校を休む日がある。

この夏、母と志望校のオープンキャンパスに行った。校舎を歩きながら、来年ここに通っている自分を想像していると、体の弱かった自分がここまで来られたことが不思議に思えてきた。あんなに入院を繰り返していたのに、我が家はどうやってあの日々を乗り切っていたのだろう。その夜、夕食の時に母に尋ねてみて、私は驚いた。私が保育園の頃から「医療保障」の備えがずっとついており、ぜんそくの入院だけでなく、その後、プールで骨折した時にも、静かに私を守ってくれていたというのだ。

気になって調べてみると、私が住む自治体には「子ども医療費助成制度」があり、中学生までは直接の医療費がほとんどかからない仕組みになっていた。だが、入院中の食事代や、母が寝泊まりしていた付き添いベッド代などは全額自己負担だ。社会の公的な制度が医療費を支え、両親が用意した民間の備えがそれ以外の見えない出費を支える。その二つが噛み合って初めて、母はお金の不安を抱えることなく、私の背中をさすることに専念できたのだと知った。

それにしても、なぜ両親は私が保育園の頃から、そんな手厚い備えを用意してくれていたのだろう。その理由は、兄にあった。兄も私と同じぜんそくで苦しみ、さらには額を五針も縫う大ケガをしていた時期があり、両親はその時に備えの

ありがたみを痛感したのだという。私が生まれる前から、私の〝見えないお守り〟は準備されていたのだ。私を守っていたこの備えは、ただのお金の契約ではない。兄の痛みと両親の経験が形を変えて、私に手渡されたものだった。

私がやがて大人になれば、手厚い〝子どものお守り〟は期限切れとなって消えてしまう。その時、自分を守るものは、自分で選ばなければならない。しかも調べていくうちに、持病がある人は保険に入る際に自分の病気を申告する必要があり、条件がついたり、入れる商品が限られたりすることもあると知った。私のお守りは、きっと簡単には手に入らない。それでも、いや、だからこそ、私は自分に合う備えを自分で探すつもりだ。これからはラケットを置き、今度はペンを握って自分の進路と向き合う番だ。兄の経験から私へと渡されたように、誰かの想いが次の誰かを守る。その優しさのバトンは、今度は自立した大人として、私が未来の家族へ手渡していくための大切な責任なのだ。